

2011年1月21日

第4回 Pacific Islanders Club 懇談会（2010年11月29日）

議事録

太平洋諸島センター（PIC）

【相馬】

- ・本日は、ポリネシア地域を中心に、同地域の中でも中心的な国、トンガとサモアの現状について、大阪学院大学の小林泉先生、法政大学の山本真鳥先生、苦小牧駒澤大学の東裕先生、太平洋諸島地域研究所主任研究員の小川和美先生の4人のパネリストの先生よりお話を伺います（以下、文中敬称略）。
- ・私もポリネシアの一つ、クック諸島への出張から戻ってきたばかりです。今回は、ニュージーランド航空とクック諸島の政府観光局および当センターの共催による研修事業を実施し、クック諸島政府観光局と日本国内の観光会社が一緒になってクック諸島の観光PRを推進するために開催したものです。クック諸島は、ニュージーランドや豪州にとっての「裏庭」的な印象があり、日本人にはあまり馴染みのない国ですが、人口わずか1万7千人程度の国に、年間16~18万の欧米人観光客が訪問しています。街並みや自然の美しさや安定した治安の面では、周辺のアジアの観光地とは比較にならない素晴らしいでした。皆さんもぜひ一度訪れてみてください。
- ・本日会場には、パシフィック・インターナショナル社のご厚意により、サモア製のノニジュースを置かせていただいております。また、隣にはトンガ産のカボチャを展示しております。さらに、講演会終了後には、トンガ産のサトイモをキリバス共和国クリスマス島産の塩で召し上がっていただく料理も用意しております。是非ご賞味ください。
- ・本日ご参加頂いたパネリストの先生方は、それぞれの国で調査研究に携わりながら、地元の関係者の皆さんとも継続的に交流を続けてこられた方ばかりです。それでは小林先生、司会をお願いいたします。



【小林】

- ・この懇談会では、太平洋島嶼国に馴染みのない方々にも知っていただくための入門編として、太平洋島嶼国を3つの地域に分け、これまでミクロネシア、メラネシアをテーマに実施してまいりました。本日はその地域編最後のポリネシアをテーマに懇談会を進めてま

ります。

・日本をはじめとする先進国から見た時、太平洋の島々に対して“南太平洋”や“楽園”といったイメージを抱きます。それらはおおむね、ポリネシア世界のイメージでした。『宝島』の作者ロバート・スティーブンソンや画家のゴーギャンたちが歩いた島々も、ほとんどポリネシア地域でした。しかしながら、ポリネシアを詳細にみていくと、国ごとに様々な違いがあります。そこで本日は、日本とも関係の大変深いトンガ王国と太平洋島嶼国地域の中では一番独立が早かったサモア独立国を中心に、他のポリネシアの島々の話題を織り交ぜながら、話を進めていきたいと思います。そこで本日のスピーカーの方々を簡単にご紹介させていただきます。

・山本真鳥先生は、法政大学の教授で、専門は文化人類学です。サモアを中心に調査をはじめられ、たくさんの論文や著書を発表されています。現在は、太平洋島嶼地域についてかなり広範にわたり研究を進められていらっしゃり、この地域の文化人類学の重鎮です。

・東裕先生は、苫小牧駒澤大学の教授で、前回フィジーをテーマにした懇談会に引き続き今回も登場していただきました。現在のトンガには、我々が考える民主化とは少し違いますが、民主化の波が押し寄せてきています。東先生はトンガ憲法の分析を通して、トンガの民主化経緯をずっと見てこられました。今回ちょうどトンガで総選挙が終わったばかりで、その情勢も踏まえながら、トンガ事情を中心にお話をいただきます。

・小川和美先生は、太平洋諸島地域研究所の主任研究員です。私は、日本人の中で太平洋島嶼国について一番詳しい人は小川さんではないかと思っています。小川さんの場合は、1回に数ヶ月、あるいは1年という単位で島々を歩いてきております。また在フィジー日本大使館専門調査員としての3年間、パラオおよびソロモンにそれぞれ3年間滞在し、最近では今年4月までの2年間、ツバルに住んでいました。また、その滞在のしかたが、日本大使館員という日本政府側の立場の時もあれば、JICA専門家として現地の政府の中



【小林泉先生】

【小川】

・「ポリネシア」という言葉は18世紀に太平洋の島々全体を表す言葉として概念化された言葉です。それが19世紀に入ってフランス人がポリネシア、メラネシア、ミクロネシアと

いう3つの形で地域区分がされていました。その時の区分けで設定されたのが、今でもポリネシアと呼ばれている地域です。北はハワイ、西はニュージーランド、東はイースター島の3つのテリトリーを三角形で囲み、その内側に入る大変多くの島々のことをポリネシアと称しています。

・具体的に今の地域区分でいうと、その中には様々な国があります。今回のテーマの中心として取り上げられることになるサモアやトンガの他、太平洋諸島フォーラムに加盟している国としてはツバル、クック、ニウエの3つがあります。それからフランス領ポリネシアですが、実はここがテリトリーとしては一番人口が多く26万人ほど住んでいますが、まだフランスの海外領です。またウォリス・アンド・フツナ。これもフランスの海外領です。さらにサモアは2つに分割されており、東半分はアメリカ領サモアで、アメリカ領になっています。そのほか、小さいところではイースター島やピトケアン島、あるいはピトケアン島から移住した人が住んでいるノーフォーク諸島もポリネシアに入れることができます、このようにいろいろな多岐にわたる島々が存在しています。

・先ほどの三角形のところで申しましたように、ハワイ、ニュージーランドも元々はポリネシア人の島でした。その後、植民地文化、西洋人の来訪及び植民地分割の中でハワイはアメリカの一部となり、当時ポリネシア人たちがアオテアロアと呼んでいたニュージーランドは、そのまま白人中心の国家になってしまったわけです。

・なぜここがポリネシアというふうに一括りにされるようになったかというと、基本的には元々そこに住んでいた人たちの身体形質が大変よく似ていたということが挙げられると思います。皆さんもご存知の通り、日本に来ていた小錦や武藏丸などの力士や、かつてK-1で活躍したマーク・ハントなど、非常に体格がよく骨格のしっかりした人々が、この辺りには住んでいます。ポリネシアの人々が日本人と韓国人と中国人の見分けが難しいように、我々がポリネシアの人々を見ても、トンガ人・サモア人・ツバル人の見分けがつかないくらい、よく似た形質を持っているのではないかと思います。

・もうひとつ特徴的な点は、メラネシアの国々と比較したとき、西洋人が来た時には社会制度がすでに整っていて、身分階層制がかなりしっかりできていたことが挙げられます。ただミクロネシアも身分階層制が整っていたわけで、じゃなぜこれらの島々もひとくくりにしなかったのかというと、やはりポリネシア人の、平たく言えば見た目、つまり身体形質の同質性から来た区分じゃないかと思っています。

・サモア、トンガ、ツバル、クック、ニウエという5つの国・地域だけに話を絞ってみると、基本的には「イギリス（とその影響下に建国された豪州・ニュージーランド）の勢力圏にあった」という共通した特徴が挙げられます。つまりその影響の下、イギリス型の政治形態を取ってきたということです。トンガは王制なので若干異なりますが、基本的に有権者が選挙で国会議員を選び、その国会議員の中から行政の長を選ぶというシステムをとっています。これは5カ国共通したやり方です。

・それから私が一番大きく感じる点は、総じて各テリトリーに住んでいる人たちがひとつ

のアイデンティティを共有していることです。ミクロネシアも多分に同様の特徴が見られます。ミクロネシア連邦のように4つの州それぞれにアイデンティティを持った人たちがあり、それらの州がひとつになって国を構成しているところがあるわけです。

- ・ポリネシアも、フランス領ポリネシアのように若干違うアイデンティティを持った人たちがひとつのテリトリーにまとまっているところもありますが、これから俎上に上がる5つのテリトリーは基本的に国民統合が非常に進んでいるという点が挙げられると思います。
- ・そのほか、メラネシアなどに比べるとキリスト教の普及が大変非常に進んでおり、日曜日には各々教会に必ず行くような風土文化を持っていることも挙げられます。

【小林】

- ・ポリネシアは比較的均質的で、英語の浸透度もかなり他地域と比べて進んでおり、移民の問題などもポリネシア的な特徴としてあると思います。
- ・次に山本先生に、現在のサモアを中心としたお話をいただきたいと思います。

【山本】

- ・サモアの現在の人口は、サモア独立国の方が17~18万人ぐらいです。また、その隣にあるアメリカ領サモアの人口は5~6万人ぐらいでしょうか。この2つは元々同じ文化を共有し、言葉の方言もほとんどなく、文化や社会組織などもほとんど同じでした。そのような同じような地域が分かれてしまったのは、植民地主義の結果です。
- ・アメリカ領サモアにはパゴパゴという良港があり、そこを基地として欲しがっていたアメリカが領土として獲得しました。ドイツは、大規模開発をしようという目的で西側を取りました。この時、イギリスはトンガを保護領とすることでサモアから手を引くということになりました。ドイツ領となった西サモアは、ドイツが第一次大戦で負けて以降、ニュージーランドが入ってきて、ずっと1962年の独立まで統治を続けました。
- ・最近、私は大変興味深く感じているのは、様々な理由で分かれてしまった東と西の両サモア地域において、気質面でアメリカ的なサモア人とイギリス的なサモア人という風に分かれ、その違いが分かれてから100年以上の歴史が経過する中で、次第に大きくなっているように感じられる点です。これは政治・経済的な問題が大きいと思われますが、アメリカとの関係で根付いてきた特徴を受けたアメリカ領サモアと、イギリスとの関係の中で根付いてきた特徴を受けたサモア独立国とで、次第に違いが生じてきたのだと思います。
- ・サモアの国土は火山島が中心の山がちの島で、国土の面でみると、東の方は少し土地が足りないのですが、西の方は肥沃な土壌が広がり、雨も豊富で、緑がいっぱい茂っています。トンガと比べた時、まだ未開発の土地も多く、緑の土地が結構豊かな点で違いが見られます。東の方は社会の仕組がアメリカと一緒にになってしまっており、教育は英語で行われている部分がかなりあります。その影響でしょうか、子どもたちはまだサモア語を喋っているのですが、敬語の使用の面などでだんだん疎くなっています。一方、西サモアで

は、伝統文化を尊ぶようなところがかなり強く、敬語教育などをしっかりとやっています。またサモア語だけでなく、伝統文化なども教える気質があります。ただ、それもあり伝統墨守という感じではなく、結構新しいものを取り入れながら、両立させているという特徴が見られます。

・移民の話が出ましたが、サモアは第二次大戦後に移民がかなり増加し始め、現在では世界中の様々なところにサモア移民が住んでいます。西の方から言えば、ニュージーランドが中心でしたが、現在はアメリカ領サモアを介して合衆国の方にも移民しています。またオーストラリアにもかなり進出しています。現在、東西サモア在住のサモア人は合わせて大体 20 数万人いると思うのですが、多分それよりも多い数のサモア人が海外に住んでいるのではないかと思われます。現在は産業がだんだんと育ってきてはいますが、従来は移民からの送金に依存していました。また現在サモア独立国は観光開発もかなり進んできています。送金と観光開発というのが、現在のかなり大きな収入源ではないかと思います。

【小林】

・ミクロネシアにも送金経済に依存する傾向が見られますが、トンガを含めたポリネシアの実態・実情を見ていく時には、送金経済というのが一つの重要なキーワードになると思います。
・次は東先生に、トンガを中心にお願いいたします。

【東】

・皆様の椅子の上にございますパンフレットの中にトンガについて記されたものが 1 枚ありますので、まずはこれをご覧ください。(同パンフレットは別添) この真ん中にあります大きな建物は、ロイヤルパレスです。これは古いもので、現在はまた別のところに移っているようです。また下の方にある大きな建物は教会です。それから、上の写真にあるしぶきを上げているのですが、これはブローホールという有名な観光名所です。
・裏に簡単なトンガの紹介があります。この地図はトンガタプ島ですが、ここのヌクアロファというのが首都です。トンガの面積は、島全部を合わせても 700 平方キロメートルぐらいということで、日本の対馬や奄美大島程度です。トンガの人口は約 10 万人で、その数はほとんど変化しておりません。先程来移民の話が出ておりますが、トンガもアメリカの西海岸、ニュージーランド、オーストラリア等に相当数の移民が進出しており、国内の人口と同じぐらいの人口が海外にいると言われております。
・また、移民による海外からの送金が、GDP の 60



【東裕先生】

パーセントとも、70 パーセントとも、あるいは 100 パーセントとも言われるぐらいの額に上っております。現在、1人当たり GNI が 2,500 米ドルですが、実際送金を受けている家庭は 9 割ぐらいになるのではないかという報告もあります。国内の産業よりも送金による経済というのが、現在の特徴です。

・トンガは、南太平洋で唯一の王国ということで紹介されております。トンガは、太平洋の中で異なった歴史を歩んでおり、非常に早い段階で国家形成が行われました。古いところでは、10 世紀の半ば頃にはすでに王制が成立したと言われております。10 世紀半ばあたりまでの歴史が口頭伝承で伝えられており、そういう歴史が伝えられている国は、太平洋ではトンガぐらいではないかと思います。

・近代国家としての歩みをどこに線引きするかということですが、トンガの場合、憲法の制定というのが極めて早い時期に行われました。1875 年です。これは我が国の明治憲法よりも 14 年早い時期です。

・今の王室の祖のトウポウ一世は 19 世紀半ばにトンガ全土を統一し、1875 年に憲法を制定したわけですが、これは当時国王の顧問であった宣教師のシャーリー・ベーカーというイギリス人が助言することにより作られました。当時は帝国主義の時代でしたが、この憲法が制定されたことによって、すでに国家形成が終わり、完全な独立国として存在していたということで、トンガは植民地化を免れた大きな要因であったかと思われます。その後、部分的な憲法の改正が行われておりますが、基本的にはこの 1875 年に作られた憲法の枠組みが今日まで維持されています。

・今回 11 月 25 日に新たな憲法制度の下で選挙がおこなわれましたが、基本的には大きな枠組みは変わっていませんし、現在も憲法の骨組み自体は変わっていません。立憲君主制の中で、今回王権が大きく制限され、民主化が進んだというような状況にあります。

・トンガ社会は、基本的には、王室、33 の貴族、国の多数を占める平民の三者により構成されています。トンガも非常に熱心なキリスト教国です。土曜の午後、日曜はほとんど街中から人通りが絶えるというような国です。

・我が国との関係でいうと、トンガでは算盤が有名です。今でも青年海外協力隊が指導していると思います。またラグビー留学とか、元横綱武蔵丸のお父さんの家がトンガタブ島にあるという関係もあります。

【小林】

・トンガの独立年は 1970 年として知られていますが、トンガの人に言わせると「私たちは最初から独立していたので、1970 年は保護領が取れただけなのだ」と言い、「独立はその前からだ」と主張します。トンガのような形ではなく、現代の国際社会認知における独立という観点からでは、1962 年のサモアが一番早かったわけです。トンガはそういう意味でもユニークで、他とは異なる国だったようあります。

・ポリネシアには、また伝統性がさまざまに残っておりますが、その中でもサモアには沢

山の伝統的なものが生きています。サモア独特の壁のない家をファレと言いますが、こんな伝統家屋が今も沢山あって、この国を訪れるたびに「サモアはもっとも南太平洋のイメージを残す国だな」と、私はいつも感じます。しかし、このサモアのような伝統を重んじている国でさえも、最近は押し寄せる近代化の波をかぶりながら、国家の変容が進んでいくようにも思えます。そういう点も含めて、山本先生にお話を伺いたい。

【山本】

- ・元々サモアは、典型的なポリネシア文化の国で、首長という勢力がいました。ただその全体が統一に向かうというトンガの統一王権のようにはならず、いくつかのパワフルな首長が並み居るという感じで、西洋との接触を迎えたわけです。その後、「王様を1人にしよう」というような努力はいろいろされてきましたが、結局あまりうまくいかずに、様々な王様が出てきました。その人が亡くなると、その子孫がなるわけではなく、別の系統の人人が一番になるなど、常に競争関係があり、それで1900年にドイツに植民地化されてしまうわけです。正確には1899年ですが、1900年から統治が始まります。
- ・ニュージーランド統治時代には、やはり「自分たちの政治がやりたい」、「自分たちで自治をしたい」ということで、国際連盟の方に請願を送るなど様々なことを行い、反政府運動も起きたのですが、最終的にはしばらく独立を待つことになります。独立は1962年です。独立の当時までには、四大首長というのがトップ・フォーと称して君臨し、そのうちの2人が連合でヘッド・オブ・ステイト（国家元首）となります。2人で合同ヘッド・オブ・ステイトが誕生しまして、首相がもう1人の人。さらにもう1人の人が副首相になるという形をとりました。その4人のトップ・フォーの首長の間で一応妥協が成立して国家形成となりましたが、国会は首長でなければ被選挙権もなければ、選挙権もないという選挙制度を採用しました。これは非常に珍しいことだと思います。近年まで「これが私たちの伝統なのだ」ということでこの制度下でやってきました。ところが、大変困ったことに、独立してしばらくすると、首長は自分たちで任命することができるということから、どんどん自分たちの選挙に優位になるように、自分の味方の首長を増やしていくということが起こります。この結果、首長称号がインフレ状態になり、どんどん増えてしまうのです。そこで1990年にはその首長制にもとづき選挙をするというのを止めました。被選挙権は現在でも首長にしかありませんが、選挙権は21歳以上の全ての人が持つという制度に変わります。
- ・この選挙制度の改定以降現在まで3～4回選挙をやっていますが、新たな問題が起きております。選挙権をどこで発動するかという問題です。都市化に伴い、それぞれ伝統的な地方社会に住んでいた人々が、首都アピアへと流入していき、アピアの人口が急増しました。こうして新しく都市に流入した人々は、故郷の選挙区と現在の住居地の選挙区どちらで選挙をするのかという問題が生じます。また、いくつも首長のタイトルを持っている人が、どこで選挙に出馬するのかということも問題となってきており、これらの問題に

について現在調整中であります。

・サモアはパーティボリティックス（政党政治）が大体 1978～79 年頃から始まります。最初の頃は混乱もあったのですが、今は比較的長期政権で、自民党よりも安定している H R P P という党があります。特に近年は一人勝ちで、かなりの安定政権と言えるのではないかと思います。

【小林】

・山本先生が、首長システムと言われていたのは、マタイ・システムのことです。ポリネシアやミクロネシアにはそれぞれ首長制度があるのですが、みんなそれぞれの地域によっての特徴があります。サモアの場合は、マタイの称号を有する人だけが選挙権を持っていましたが、それが普通選挙になりました。ただし、現在も被選挙権だけはマタイだけに与えられております。

・それでは次に、トンガのシステムと最近の民主化動向について、東先生、お願ひいたします。

【東】

・トンガの従来の政治制度は、国王が国家元首でトップにおり、国王が絶対的な権力を握っていました。絶対的な権力と申しましても、国王の下に立法評議会、いわゆる国会、それから内閣、裁判所という三権分立をとっていました。さらに国王のすぐ下に枢密院という、最高行政機関がありますが、憲法がある以上、政体としては立憲君主制で間違いないわけです。国王は決して無制限な権力を持っていたというわけではなくて、憲法で定められた権力を行使してきたわけで、憲法で定められた国王の権力が強大でした。

・日本の国会に当たる立法評議会が、今回大きく変わったところがひとつの特徴的な点です。トンガの社会構造は、国王、貴族、平民で構成されていますが、これを反映するような国会の構成になっており、平民 (People's Representative) 議席が 9 議席、貴族 (Noble's) 議席が 9 議席でした。それ以外に、国王に任命された大臣は立法評議会の中で議席を有しており、国王もまたその中にいます。またババウ、ハアパイという地域がありますが、その知事も国會議員になることで、立法評議会は 31～32 程度の議席で構成されてきました。そのうちの 9 議席だけが国民の大半を占める平民の議席だったのです。

・トンガにおける民主化運動、これは 80 年代から始まっておりますが、その指導者であったのがアキリシ・ポヒバです。この人がこれまで民主化運動をおよそ 30 年続けてきましたが、11 月 25 日に行われた選挙で、今度新たに「フレンドリー・アイラント民主党 (Friendly Islands Democratic Party)」を結成し、党代表となりました。今回改正された議席数の改正で、平民の代表議席数は 9 議席から 17 議席に増加し、そのうちこの民主党が 12 議席を獲得しました。残りの 5 議席は無所属であると伝えられております。一方、貴族議席の方は 9 議席そのまま残されており、国王の任命によるものがなくなったということ

です。それから、この選挙制度の改正は憲法の改正に伴って変更がなされたのです。その憲法改正については、昨年の11月に改正案が提出されており、その後若干の修正を経て憲法改正が成立したものであると理解しておりますが、その最終的な憲法というものは、私はまだ見ておりません。現地の人から伝えられたところによりますと、国会の議席は、あと4議席、首相が任命する議席としてあるようです。

・もちろん首相はこれまで国王による任命だったのが、今後はこの国会の中で首相が選出されます。我が国と同じようなシステムです。また首相が閣僚を任命するというシステムになっています。これまででは国王が全て首相・大臣を任命していたわけです。これは特に何年という任期がなかったのです。そういう非常に王権の強い国がありました。

・トンガにおける民主化というのは何かというと、これは誤解している人がいるかもしれません、決して君主制をやめるということではありません。君主制の枠組みの中で、平民代表の声をより反映できるような国会の構成にしようということなのです。また、国王の権限をもう少し制限し、イギリス型、あるいは日本型のような立憲君主制の中での議院内閣制を組織することが重要なことで、この30年ほど行われてきたトンガの民主化運動も、決して共和制になるという運動ではなかったというのが特徴です。

【小林】

・ポリネシアの中には、PIFのメンバーでありながらも、日本ではクック諸島とニウエは独立国だとは言っていません。これはニュージーランドとの自由連合協定を結んでいる、いわゆる自由連合関係にある国だからです。現在の国家形成の中で、政治的な枠組みの違いも含めて、トンガとサモアとの関連で小川さんにお話しいただきたい。

【小川】

・クック諸島とニウエというの、太平洋諸島フォーラムの加盟国ではあるものの、日本は国家承認をしていません。同じ自由連合国でもアメリカと自由連合を結んでいるミクロネシア3国とは国交を結んでいるのですが、どこが違うのかというと、ミクロ3国の場合、自分の国のパスポートを使っているのに対し、クック諸島とニウエの人たちはニュージーランドのパスポートを使っているのが違います。おそらくここが同じ自由連合国でも日本の扱いが違う一番大きな点だと思います。

・国家承認問題については、また別の機会にゆっくり話したいのですが、それが当該社会にどういう影響を与えていたかというと、先ほどサモアとトンガのところで移民が多いという指摘がありましたが、クック、ニウエからはそれ以上にどんどん人口流出が進んでいく点が挙げられると思います。彼らはニュージーランドのパスポート（つまり市民権）を持っていて、サモアやトンガの人たちよりもニュージーランドに行きやすいのです。特に一番顕著なのはニウエです。1970年代前半には5,000人ぐらいの人々がニウエというひとつの島に住んでいましたが、今では1,400人ぐらい住んでいません。一方で、ニュー

ジーランドに住んでいるニウ工人は、2万2,000人を超えていました。本国住民の10倍以上のニウ工人がニュージーランドに住んでいます。ニウ工人というアイデンティティを持ちながらニュージーランドに移住し、さらには「ニュージーランド市民」ですから、オーストラリアにも自由に移住できるわけです。

・サモア、トンガの場合は出でていく数である社会減の数と、赤ちゃんが生まれて増えていく自然増の数とがそれなりにバランスのとれた状態にあるのですが、ニウ工の場合はどんどん人が減っており、非常に大きな社会の問題になっています。ひとつの村では人がほぼいなくなってしまいました。その村を維持するためにどうしたかというと、ツバルから人を呼びました。ニウ工島はかなり大きな島なのですが、その一番南にある村のほぼ全ての住民はツバル人です。なぜでツバル人がニウ工に移民したのかというと、ツバルは地球温暖化で住めなくなるという話からニウ工が受け入れたという経緯があります。一方個々のツバル人側にしてみると、ニウ工に一定年数住んでいるとニウ工の市民権が取得でき、ということはニュージーランドのパスポートがもらえるので、その後ニュージーランドに合法的に移民できるというメリットがあったわけです。



【小川和美先生】

・また、もうひとつネガティブな問題に、頭脳流出という問題があります。一生懸命国が援助して、あるいは援助をもらって人材の育成を進めても、人々は雇用がいっぱいあり給料が高いオーストラリアやニュージーランドの方に簡単に移住してしまいます。優秀な人材が流出してしまうことでなかなか思うように開発が進まないということもポリネシアの場合ではかなり深刻な問題としては起きています。

・人の移動の問題は領域内部でも起きていて、たくさんの島から成る国々では中心の島へ周辺の島から人々がどんどん移動していくという事態も生じています。クック諸島は、先ほど相馬所長からもとても素晴らしいところだったという紹介がありましたが、私もとても好きなところです。しかし繁栄しているのは主島のラロトンガ島に限った話でして、特に90年代以降は離島の住民数が急激に減少しています。みなラロトンガに移り住み、あるいはラロトンガをステッピングストーンにして、国外に行ってしまうわけです。私は、8～9月にクック諸島を訪問したのですが、離島を訪れたところ、10～15年前と比べ村が空き家だらけになっていてかなり驚きました。

・ツバルも同様で、首都であるフナフチには国内全人口1万人のうち5,000人ぐらいが住んでいます。独立前までは、国内8つの島の中でフナフチの人口は3番目に多い島でしたが、独立したことによって、政府機関ができフナフチに集中的にインフラが整いました。当然雇用も集中しますから、現金収入の機会があるということで離島からどんどんフナフ

チの方へと人口移動が進み、フナフチへの一極集中が起こりました。狭い環礁であるフナフチへの人口集中は水不足や海水汚染をもたらし、一方離島の方では開発の糸口すらつかめないという状況が起きてしまいます。こうした国内移動による人口の不均衡は現在深刻な問題となっているように思います。

・以上、今現在ポリネシア地域で進行中の人口移動に関する頭の痛い問題をお話ししましたが、もうひとつの切り口として自治権のお話をしたいと思います。1960年代から国際的な民族自決の流れに乗って、太平洋の島々は次々と独立を果たしてきました。それは、自由連合という形にしろ、一様に「自治権の獲得を目指す」という流れでした。現在はフランス領ポリネシアがフランスから独立あるいは自治権拡大をしたいとして、困難な政治的駆け引きを続けています。

・さて、サモアの北側にニュージーランドの領土でトケラウという地域があります。そこには3つの島に約500人ずつ、合計1,500人の住民が住んでいるのですが、ここはニュージーランドの海外領で、国連の「脱植民地化リスト」に入っています。ニュージーランドはこの状態を解消したいと望んでおり、この20年あまり「お前ら自治政府を作れ」と強く迫っていますが、トケラウ人は自治権を持ちたがりません。2006年にニュージーランドとの自由連合国になる可否を問う住民投票がありましたが否決、翌2007年にももう一度投票を行いましたが、やはり自治権獲得に必要な3分の2の賛成を得られず否決されました。なぜトケラウ人は自治権を要らないと思っているのか、18年前にトケラウを訪問した際にこの話になったとき、彼らは「俺たち1,500人ぐらいしかいないよ」、「1,500人で独立できるわけがないだろう」と言っていました。人がいない、産業もない、独立したって経済的にやっていけるわけないじゃないか、と。

・もうひとつのポイントは、先ほどお話しした人口集中と移民の問題です。3つの島から成るトケラウで自治政府を作るとどうなるか、ひとつの島に人口が集中してしまい、必ず不均衡が生じて問題になるという主張でした。「ツバルは自治政府を作ったから、フナフチだけに人が集まってしまった」とトケラウ人は指摘するわけです。トケラウは今、おおざっぱに言って500人、500人、500人で3島に平均的に住んでおり、3島ともそれぞれ平等にありたいと望んでいます。例えば中学校も、毎年毎年持ち回りで各島を移動します。

・それから一時ニュージーランドはトケラウに飛行場を作ろうとしたことがあります。トケラウ人は要らないと主張しました。その理由は「(トケラウに)飛行場を作るとニウエになる」ということでした。飛行場ができると人の流出が加速化し、島の社会が破綻する、だから、飛行場は要らないと主張したわけです。

・それから15年以上がたち、否決されたとはいえ住民投票では3分の2弱の人たちが自治政府を作ることに賛成した現実がありますから、トケラウでも今ではこれは決して多数派の意見ではないかもしれません。でもそのとき受けた衝撃はとても鮮烈で興味深いものでした。ポリネシアの、何ヶ月かに一度しか船の来ない田舎の島に住みながら、自分たちにとって何が現実で何が必要なのか、周りの島々の状況と比較しながら訥々と語ってくれ

たトケラウ人の姿は、ポリネシアの奥深さとすばらしさとして今でも強く印象に残っています。

【小林】

・私も含めてここにいる3人の先生方は皆さんと同様に、基本的に太平洋島嶼国のことの大変好きなのですが、そんな視線から、最後に日本人の目から見たポリネシアの魅力という観点から、お話をいただきたいと思います。

【東】

・先ほど御指摘があった通り、まさに日本で紹介されるポリネシアのイメージというのは、サモアだとかタヒチだとかが主流で、トンガというのはそういうイメージからは、離れているのかなという感じがします。

・私はフィジーとトンガをよく比較しながら見ているわけですが、トンガの場合は、いろんな産業開発、特に観光面を考えても、客観的に見た時厳しいのかなという感じがします。人口も10万程度ですし、メインの島あるトンガダブ島は平坦な島で、早くから開発が進んで椰子の木等の畑や農地が広がっています。また海岸線もそれほど南太平洋でイメージするようなところは、トンガタブ島にはありません。この点からも観光開発には限界があると思われます。ただ、フィジーとトンガ、両方訪れた場合、フィジーからトンガに行くと、非常に落ち着いた安らげる雰囲気があります。日本の地方の町や村に行くと感じられるような安らぎを感じる島、癒しの島と言いますか、そういう魅力がトンガにはあるのかなと思われます。

・もうひとつの特徴は、トンガ人気質です。「フレンドリーアイランド」と昔から言われてきましたように、非常に気さくで話していて気持ちのいい方が多い点が挙げられます。フィジーに行きますと経済活動を中心にインド系とフィジー系の人々が活躍しており、かなりの競争社会のような感じを受けるわけですが、そういう点ではトンガはゆっくりと時間が流れ、安らげるという魅力があります。この魅力を観光開発に結びつけられることができれば、開発の余地があるのではないかという気がします。

・また、農業開発という点ではカボチャ生産が挙げられます。現在、カボチャも世界中いろいろなところで作られており、トンガのカボチャについても、国家経済にとってのメリットは相対的に低下しているようですが、やはりトンガにとって農作物の輸出は重要な経済活動の一つです。農業国家としてあり続けるというのも、またトンガの経済開発を考える場合のひとつの形であると思います。

・人材という点で言えば、トンガは非常に教育レベルが高いという特徴があります。移民が多いというのも一つで、海外に留学する人も多いです。また、政府機関でも非常に高学歴の人が多く、PhDを持つ人物もいるなど優秀な人材が豊富に存在します。移民による送金という話題もありましたが、もっと教育、人材の育成に力を入れて、どんどん海外でト

ンガ人が活躍し、国内に送金してトンガ経済を底上げするというのもひとつ的方法であるという気がします。ただし、それを支えているのはトンガの人々に受け継がれてきた家族制度、すなわち大家族の中で育つという伝統的な家族システムがあるからこそ、この経済ネットワークが成立するわけです。その紐帯が切れてしまふと、もう送金経済も成り立たなくなります。このような社会システムの変容の推移が今後の課題になると思われます。

【小林】

・トンガ、サモアからは、結構たくさんのラグビー選手が日本に来ています。実際、ラグビー選手とその家族を中心にしたコミュニティが日本にもできています。そういうラグビーの輸出なども、今のお話に含まれているのかもしれません。

【小川】

・私があちこち回りながら思ったのが、ポリネシアの人たちは、外来者に対して非常に寛容な文化を持っているということでした。太平洋は大抵みんなどこでもそういう傾向はあるのですが、特にポリネシアの人たちは、外からポツと出でやつてきた旅行者に対して非常に優しいです。うちに来いとか、メシ食つていけとか、泊まっていけとか、そういうのをよく言ってくれます。それはキャプテンクックの時代、トンガにフレンドリーアイランドの名を付け、安全な補給・寄港地としてタヒチを選択していた頃から、変わらない伝統としてあるのではないかと思われます。こうしたポリネシアに伝統的な他者との接触のあり方を根底にして、白人たちが流布した楽園のイメージがすんなり広がっていったんだと思います。

・ラロトンガあたりだとちょっと難しいのですけれども、トンガでもサモアでも、観光客のあまり来ない村を歩くなんていうことが結構できます。これはポリネシアの人の素晴らしさを実感できるいいチャンスになるのではないかと思います。また繰り返しになりますけれども、非常に知的水準の高い方々が多いです。識字率はほぼ 100 パーセントですし、Ph.D を持っている人も非常に多いです。こちらの方が教えてもらうことは少なくないですし、いろいろ面白い話ができるのではないかと思います。

・経済的な部分なのですけども、実はポリネシアというのはやはり島が小さくて、例えばタヒチで 118 島ありますけれども、100 キロ平米以上ある島は 6 つしかありません。ミクロネシアと同様に小さな島ばかりです。そういう小さいところなので、大手の会社が行って、大規模な開発や事業をするというのにはあまり適していないかもしれません。また漁業資源の面でもミクロやメラネシアの方に比べるとあまり魅力のあるところではありません。観光を除くと、大手企業というよりも、もう少し小回りのきく会社や個人が進出し、あるいは投資する方が適しているかもしれません。

・その中で、ひとつ大きなポテンシャルのある部分として、海底資源があります。ニッケ

ルやマンガン等の資源が、海底にたくさん眠っています。これらが採算ベースでの本格採掘に動き出すのはまだ少し先の話かもしれません、すでに韓国や中国などの企業がトンガとかクック諸島の沖合での海底資源に触手を伸ばしています。日本は90年代にSOPACという地域機関にJICAを通じて専門家を派遣し、資源探査に協力するとともに情報収集を実施していました。ところが現在は日本側の動きはほとんどなく、今後どのようにしてこれら資源にアクセスする道筋をつけていくつもりなのかが全然伝わってきません。是非行政の方々には、大洋州地域の海底資源開発について日本はこれからどう取り組んでいくか、そのためにどういう行動をとるべきか、20~30年にわたる長期のスパンで考え、少しずつ地ならしをしていっていただきたいと思います。そしてそれが地元の雇用なり外貨収入なりに繋がっていく形になれば、太平洋島嶼国側も喜ぶことになるのではないかなと思います。

【小林】

- ・最後に山本先生お願いします。

【山本】

- ・サモアというかポリネシア全般についての生活の面で言えば、やはり非常に暮らしやすいという点が挙げられます。その理由としてひとつには毒蛇がない、それからもうひとつはマラリアがないということです。そういう意味では病気というのは大変少なく、メラネシアに行った同僚は、「それだけでええやん」と言っていました。
- ・それから、人々が割と寛容で、大家族で暮らしていて、ちょっと毛色の違う人が入ってきて、あまり厭わずに入れてくれるという点です。そういう点では大変面倒見がいいし、何かそういう気持ちの豊かさというものを持っているなあといつも感心します。

- ・また人々の生活リズムに関しても、豊かさが見られます。どうも東京などにいるとせせこましくて、本当に毎日寝る間も惜しんで何か忙しくやっている感じで、例えば東京では2時間かけて会社に通ってくるというケースも多いのですが、そういうことはサモアではありません。

【山本真鳥先生】
残業とかもほとんどなく、村からバスに乗って通勤してくるのですが、5時半とか6時ぐらいまでは帰宅し、それから青年団などのコミュニティ活動をしています。このように人々の暮らしが会社だけに縛られることはなくて、いろんな人間関係の中で出来上がっていて、こうしたネットワークにもとづき生活していき、豊かな人生を送っているのです。



・それから、家庭生活にしても小規模な家族ではないので、労働力はいつでもあり、働いている女の人も、子供の面倒を家族に任せて行けるため、そういう点でも豊かさというものをすごく感じます。収入などの経済的な面では必ずしも豊かではないのですが、いつもゆったりしていていいなあと思うわけです。

【小林】

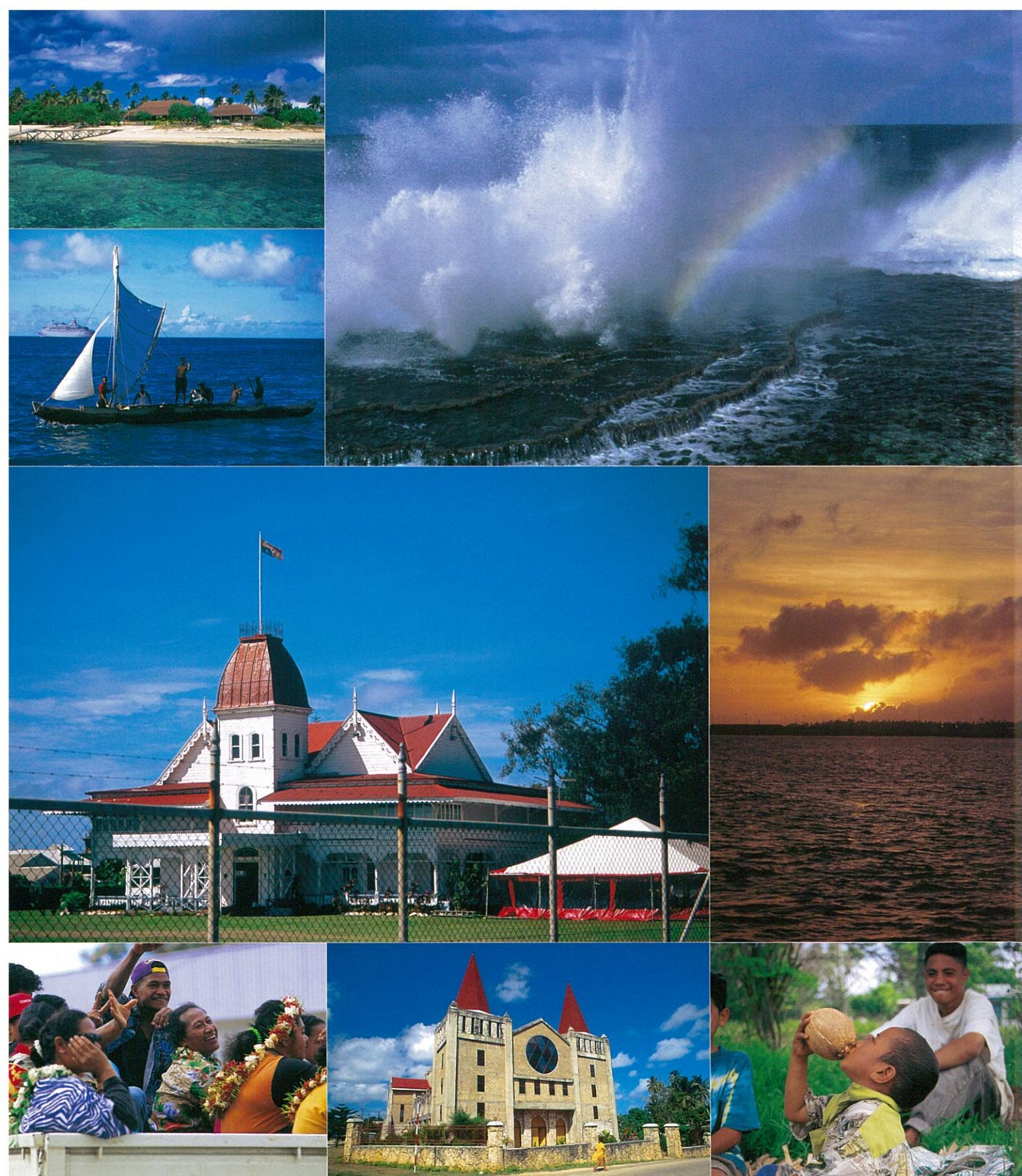
・ポリネシア、ミクロネシア、メラネシアと厳密に分けていくと、やはり印象的にはかなり違うなというのを私自身も感じています。だいぶ前のことですが、私は島嶼諸国のジャーナリストを各国から一同に日本に招聘し、各地を連れ回したことがあります。その時に感じたのは、メラネシアの人々は一般論で言うと、どちらかと言えば「暗い」というか、あんまり初対面で打ち解けない人たちという印象でした。またミクロネシア人は、どちらかというとシャイな感じで、一緒に踊ろうよと引っ張り出しても、最初は嫌だ嫌だと言って応じない。しかし、そのうちに打ち解けて、踊り出す。その点、ポリネシアの人々は何も言わなくても「踊ろう」と言って、自ら周りを積極的に盛り上げる。もう明るさが全然違うのですね。これは決して個人的な性格の違いだったのではないと思います。ポリネシア人は、ものすごくフレンドリーで、そういうところから生まれるホスピタリティーが、外部から来た人にとって心地よい印象を与えてきたのでしょう。まさに観光の基本的な条件が、自ずと備わっていると言ってもいい。五つ星の高級ホテルで受ける国際標準のサービスは良いですけれど、それはどこの国に行っても同じです。ですが、そうしたホテルがなくとも、島々を訪れてそこに住む人たちと触れ合う中で、島々のホスピタリティーを感じることができます。

・もちろん私は、ポリネシアが一番いいと言ったわけではありません。メラネシア人はメラネシア人で、仲良しになると非常に情が厚いという特徴があります。面白いことに、私の知る限りでは、ポリネシア、ミクロネシア、メラネシアのそれぞれにファンがいます。メラネシアが好きな人は、たいていポリネシアにもミクロネシアにも関心を示さない。またその逆もあって、ポリネシア好きの人はあまり他の地域を好きになれない。そういう方々から感じるのは、やはりそれぞれの地域にはその地域ならではの個性的な魅力があって、いろいろなタイプの人々たちを魅了するでしょう。それゆえに、今後も地域ごとの魅力や特徴を踏まえながら、島嶼国について勉強する機会を設けていただけたらと思います。



・本日は、このくらいで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

(終了)



マロ・エ・レレイ
Malo e lelei!
(こんにちは!)



左上の白地に赤い十字は国
教のキリスト教を表し、白は平
和と偏りのない心を、また地色
の赤は聖なるキリストの血の
色を表しています。

フレンドリー・アイランド・トンガ

Tonga

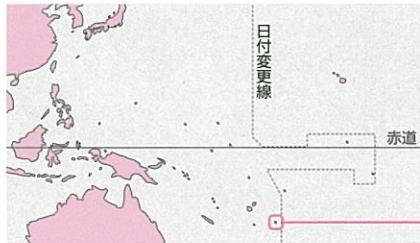
Kingdom of Tonga

Tonga

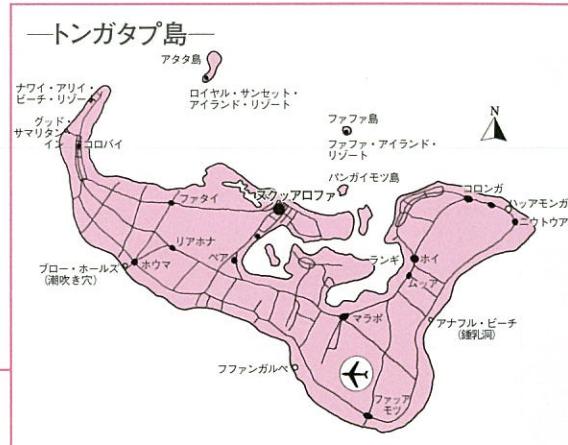
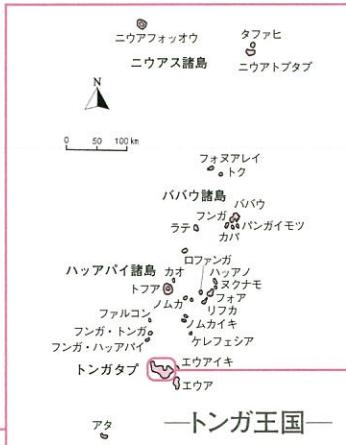
トンガ王国

日本からのアクセス(2005年5月現在)

日本からの直行便はなく、斐ジーのナンディやニュージーランドのオークランドで乗換えてトンガタブ島へ行くのが一般的です。ナンディ→トンガタブ島間はエア・パシフィック航空が週3便運航、オークランド→トンガタブ島間はニュージーランド航空がほぼ毎日運航。



南太平洋で唯一の王様の国、トンガ。トンガの人々は、その大きな身体にふさわしくおおらかな心でゆったりと暮らしています。踊りや手工芸品などに見られる独自の文化、そして古代へのロマンをかきたてる巨石建造物やホエールウォッキングなどのアクティビティ。トンガでは流れる時間も人の心も、どこかスケールが違います。悠久の時の流れ、自然との一体感を、強く感じることのできる国のひとつです。



『ガリバー旅行記』のモデルといわれるこの国は、南太平洋唯一の王国

正式国名・首都

トンガ王国(Kingdom of Tonga)。首都ヌクアロファ Nuku'alofa で、トンガ最大の島であるトンガタブ島にあります。

日本との時差

トンガの現地時間は日本の時間+4時間(UTC+13)。

国土・地理

トンガタブ島のように珊瑚からなる中・南部の島々では扁平な地形が特徴的です。一方、北部に点在する島の多くは火山島で、トンガで2番目に大きいババウ島には標高210mの山があります。島の数は約170、陸地の総面積は約700km²で、東京都の約3分の1の広さに相当します。

トンガの人々

総人口は約10万人(2003年推計)。約170の島のうち130島あまりに人が住み、トンガタブ島だけで約

7万人が住んでいます。人々の多くはポリネシア系で、敬虔なクリスチャン。大柄でたくましい体型をしています。ラグビーやクリケットなどのスポーツが盛んで、日本の相撲界で活躍したトンガ人力士もいます。

言葉

公用語はトンガ語と英語。

おもな産業

農業が主要な産業で、国民のおよそ50%が農業に従事しており、新しい輸出作物の開発にも熱心です。バナナ、ココナツ、バニラ、そして健康飲料として注目を浴びているノニの果汁などが作られています。トンガ産のカボチャやノニ果汁は日本にも輸出されています。漁業は自給自足の域を出ませんが、各国の援助で少しづつ伸びています。

歴史

トンガに最初に人が住み着いたのは、紀元前1000

年ごろ、斐ジーからやってきたのではないか、といわれています。トンガを訪れた最初の欧米人はスペイン人航海家で、1616年のことでした。その後、タスマニア、オーストラリア、クックなどが相次いで訪れます。18~19世紀にはキリスト教が広まります。この時代は内戦が多く起きましたが、1845年に19代目ツイ・カナクボルのタウファアハウ・ツポウガキング・シアオシ・ツボウの称号を名乗り、内戦を終結させ、初めてのキング(国王)としての統治が始まりました。現在の国王はこのときから数えて4代目となります。1900年に英國の保護領となりました。独立は1970年6月4日。

日本との関係

国王は大の親日家として知られ、トンガの人々も日本にとても親しみをもっています。文化、スポーツ面での交流関係も長く、多くのラグビー選手が日本の大学や企業のチームで活躍しています。

・在留邦人数:71人(2003年10月現在)

・在日トンガ人数:86名(2002年末現在)

おとぎの国のような王宮とハッアモンガは必見。トンガの文化体験やマリンスポーツも

気候・服装

貿易風の吹く5~11月が乾期で、雨期は12~4月です。乾期は比較的涼しく、雨期よりしのぎやすくなります。北部の方が降雨量が多く、南部のほうが気温は低め。トンガタブ島の年間平均気温は21℃。7~8月に訪れる、思ったより涼しく感じます。女性は肌の露出をひかえたファッショントルクを心掛けましょう。

アクティビティ

ダイビング、フィッシング、ホエールウォッキングなどが

楽しめるほか、王宮や遺跡などの歴史的建造物をめぐるツアー、アイランドリゾートへの日帰りツアーも人気です。伝統的なトンガのダンスはナショナル・センターやホテルなどのディナーショーで見ることができます。日曜日は「安息日」となり、アイランドリゾートへの日帰りツアーは楽しめますが、他の島内ツアーなどはすべてお休みという本当に静かな1日となります。

食べ物

タロイモやパンの実、豚や鶏、魚などを、熱く焼いた

石の上に乗せ、バナナなどの葉で覆い蒸し焼きにするウム料理は、トンガの伝統的な料理法で、ナショナルセンターやホテルなどのディナーショーで食べることができます。シーフードレストランや中華レストランなどもあります。

通貨・日本円からの交換レート

パッアンガ(TOP)。トンガドル(T\$)ともいいます。トラベラーズチェックからの交換レートは1TOP=約55円、現金からは1TOP=約60円(2005年5月)。

お問い合わせ先

Tonga Visitors Bureau

G.P.O.Box37,Nuku'alofa,

Kingdom of Tonga

Tel. (676) 25334

Fax. (676) 23507

<http://www.tongaholiday.com> (English)

伝説のムー大陸を想像させる巨石文化

トンガの人は大柄で、「ガリバー旅行記」のモデルに例えられたりしますが、トンガタブ島には太平洋にまつわる有名な伝説「ムー大陸」を連想させるかのような巨石文化の名残が残されています。一つは巨大墳墓(ピラミッド)の「ランギ」です。トンガ全体では46、トンガタブ島には28のランギが確認されています。中でもムアにあるランギは最大規模のも



※掲載の記事・写真・地図の無断転載を禁じます。